西宮文学案内
第２回「ミステリー文学と阪神間の風土」

日時：2011 年 10 月 27 日（木）16 時 50 分から
場所：関西学院大学　西宮上ケ原キャンパス
講師：有栖川有栖（推理作家）

河　内：それでは始めさせていただきます。きょうはミステリー作家の有栖川有栖先生をお招きしまして、いろいろお話をうかがいたいと思います。聞き手を務めさせていただきます、この文学シリーズの企画立案をしております河内厚郎です。こちらは有栖川有栖先生です、よろしくお願いします。

有栖川：いま入口に講師有栖川有栖となっていました。河内さんが聞き手とおっしゃいましたが、どちらかというと対談というか、放談形式でやらせていただきますのでご容赦ください。

河　内：二人でずいぶん対談をあっちこっちでやっていまして、１冊『大阪探偵団』という本もありますけれども、きょうも録音しまして、本にしてみたいなと思ったりもします。

有栖川：本になるんですか。

河　内：何の打ち合わせもしていなくて、ぶっつけになります。後ほど簡単に質問コーナーを設けたいと思いますので、許される範囲でお答えできると思います。ちょっと風邪をひいていらっしゃるんですか。

有栖川：すみません、風邪気味で。お聞き苦しい点があったらご容赦ください。そればっかりですが。

河　内：有栖川有栖というのは、もちろんペンネームです。本名は普通の名前があるわけですけれども、非常に印象的な名前なので、なかには女性だと最初、昔、思っていた人もいるようですが、もうさすがに慣れましたかね。

有栖川：どうなんでしょうね。デビューして 23 年目ぐらいですから。だいぶなじんでもらったかもしれないですが、いまだに知らない人は知らないですから奇異に響くでしょう。

河　内：いま日本を代表する本格ミステリー作家になられましたが、本格ミステリーというのは、つまり謎解きということになるわけです。いわゆる社会派とかいろいろなものがありますが、本当に謎解きのミステリーという。それが本当に王道。

有栖川：王道という言葉は偉そうですが、一番古いタイプの古典的なスタイルですね。名探偵、探偵役が出てきて、複雑な事件を推理で解きほぐす。犯人がいろいろ知能犯で、トリックを利用したりするというパターンです。推理小説はそこから始ま

っているんですが、そのあといろいろ枝分かれしていきます。本格ミステリーの特徴は謎を解くことですので、推理小説は全部謎を解くんじゃないかと思われるかもしれませんが、実は、推理小説は謎を解くタイプの小説はあんまり多くない。

河　内：そうですか。

有栖川：多くないというか、言い切ってしまうと、サスペンス小説というのは、途中のはらはらどきどきが眼目なんです。ここ数年流行した警察小説というのは、警察が組織的な捜査を行って事件を解決すると。それをリアルに描く。警察の捜査はどういうふうになっているのかというのは、誰しも興味ありますよね。組織力、科学捜査、あるいは組織人を描くことに力点を置きます。事件という謎を解くには解くんですが、推理で解くというより調べ上げるというニュアンスがあります。社会派推理というものもあります。これはリアルな現実の社会でいま起きているような事件とか、明日起きるかもしれないであろう事件を、社会背景とともに足が地に着いたかたちで描いた小説。警察小説や社会派推理はアクロバティックな論理で謎を解くわけではないので、私に言わせると、秘密が暴かれていく物語です。推理小説はミステリーとも呼ばれます。ミステリーというのは謎という意味と秘密という意味と両方ありますから、謎を解くのが本格ミステリー、それ以外の多くのミステリーは得てして秘密が暴かれていく物語と解釈できそうです。秘密が暴かれるというのはサスペンスがありますからね。秘密というからには何かしら複雑なものがからんでいるわけです。それを解きほぐすといえば解きほぐすのですが、パズルを解くように解くというのとはちょっと違います。

河　内：往年の松本清張。これはどうなんですか。

有栖川：松本清張の小説は、典型的な秘密が暴かれていく物語です。もちろん、『点と線』『時間の習俗』とか、犯人がアリバイ工作をしていて、そのアリバイトリックはどういうふうになっているのかというのを刑事が考えたり、解き明かしたりする場面がありますが、そんな複雑なトリックでもない。むしろ人間関係にこういうところに盲点があったと。こういうところに人間心理、実はAさんとBさんが仲がいいと思っていたけれど、いやあれは表面的には仲がいいかもしれないけれども、ああいう状況では実はAはBを恨むぞというような、心理のあやという、そういったものを描いているので、小説として書くに値するテーマを普通に書いている。ただ、扱っている素材が犯罪であるということです。推理小説と呼ばなくてもいいタイプの小説もたくさん書いています。

河　内：清張さんの影響を受けたんじゃないかと思いますが、森村誠一さんとか。

有栖川：森村誠一さんは、デビューなさったのが1970年ぐらいだったと思います。

河　内：万国博覧会の年ですか。

有栖川：万国博覧会のあたりですね。江戸川乱歩賞を『高層の死角』という小説で取ってデビューなさったんですが、森村さんは非常に面白いスタンスをとられて、当時

は松本清張以降の潮流で社会派ミステリーがまだ盛んでした。森村さんのデビュー作『高層の死角』というのは、ホテル業界の裏面を描いている。『新幹線殺人事件』というのは、芸能界が舞台になっています。わりとどろどろしたものがあって、そういったものをスキャンダラスに描いたりして、実はこういうことがあるんだよと言いながら、そこは松本清張から始まった社会派推理、社会の裏側を描く、そういうところにつながっています。それと同時に、森村さんはものすごく古典的な密室トリックとかアリバイトリックをいっぱい使うんです。これは松本清張も使ったでしょと言われるかもしれませんが、松本清張はそんなに凝ったものは使っていないんです。わりとシンプルなトリックを使っている。森村さんのは、現実社会、いま自分たちが生きている社会で起きている問題なんかを突っ込んで書いたような小説のなかに、現代人の欲望とか孤独とか、そういったものを描きながらものすごく古いタイプの推理小説で使われる密室トリックとかアリバイトリックとかがぽんと出てくるので、新旧の推理小説の２本立て、折衷しているようにも見えます。トリックとかアリバイ、アリバイには密室のトリックを書きたいんだけれど、それを書くと古いと言われる。社会派ミステリーを書くと、だけじゃなくてそれを盛り込みたいときに、強引に足したんじゃないかという見方が一部にあるです。もちろんそれは面白いから、面白いからいいという前提ももっともなんだけれど、なんかこうしっくりしないなという見方をする人もいるですが、私はそうじゃないと考えます。森村誠一さんは、本格ミステリーが大好きなんです。トリックがすごくお好きでうまいんです。でも、それはいまどきはやらないという感じだったんですよ、1970 年代というのは。

河　内：社会派ミステリーの時代ですね。

有栖川：社会派ミステリーの方が新しい。お断りしておくと、推理小説と言ったりミステリーと言ったりしますか、まったく同じ意味で使っているので気になさらないでください。

河　内：非現実的な探偵が出てくるというのは、時代遅れになっていたわけですね。

有栖川：名探偵なんてもういまの時代はいないでしょうと。いないといえば身もふたもないんですが。トリックを天才的な頭脳の持ち主が暴くというタイプの小説が古臭いとされていたときに、強引に設定したように見えますけれども、私の目にはものすごく納得のいくかたちになっていると思います。森村さんの小説はかなり身につまされる話が多くて、個人が組織に押しつぶされる話が多い。

河　内：組織にね。

有栖川：そのときの組織というのは、えてして悪役になったのは当時の大企業ですね。大企業に押しつぶされる個人、結局その個人が復讐するんです。自分を不幸にしたものを復讐するというふうに、相手がむちゃくちゃ強いわけですよ。相手も個人だったりするけれども、バックに企業が、巨大企業があるんですね。あるいは森

村さんのバックに政府があったり、自衛隊があったりというのもありますが。あの人は反権力の人ですから。そういうときにアリバイトリックとか密室トリックというのは、要は私の言葉でいうと「手づくりの奇跡」なんです。そんなに組織力、お金もあれば権力もあるものに対して、押しつぶされそうな弱い個人が復讐するときに、アリバイ工作をして、警察が見抜けない。それは個人がものすごく大きな存在に復讐するのに、「手づくりの奇跡」という意味合いを帯びてきていて、あの時代の日本の推理小説にしか表現できないことだったような気がするんです。森村さんの出世作は『新幹線殺人事件』ですが、これは平凡なタイトルに思われるかもしれませんが、当時は斬新だったんです。殺人事件というタイトルが古臭いからみんな使っていなかったんです。横溝正史の。

河　内：ちょっとマイクを交換します。

有栖川：そうですか、すみません。あ、全然違いますね。私の方が滑舌も悪いので、いいマイクを使わせてもらいます。すみません。『新幹線殺人事件』の話でしたね。殺人事件という言葉がはやってなかったときに、ところが森村さんは逆を行ったんです。いま使うとかえって新鮮だろうと。殺人事件とかいう、何とか殺人事件という小説は山ほどあると皆さんは思っていらっしゃるでしょうが、その当時はやっていなかったから、新幹線の殺人事件という当たり前みたいなタイトルがは新鮮だったんですよ。殺人事件とかいうタイトルは、昔は古臭い言葉だったんです。本陣殺人事件なんてとても古臭いでしょ。おどろおどろとか古臭いとなっていたときに、新幹線ですよ。当時、新幹線が走り出してまだ10年たっていないですから、最先端のものです。しかもそのあと『超高層ホテル殺人事件』『東京空港殺人事件』といったタイトルの作品が続きます。現代的なものプラス殺人事件というパターンです。

河　内：われわれの時代は、戦う敵というのが昔みたいな顔の見える権力ではなくて、高度資本主義下の複雑で、巨大な敵になっているのに、そこへ一人で立ち向かっていくという論理が、ある意味で探偵小説の伝統というか。

有栖川：新幹線というのはね、私もサラリーマンをしていましたからよく使いましたが、あれって本当に人をこき使いますよね。東京だと昔は必ず泊りがけで行ったものでしょう。往復7時間ぐらいかけて行って、大阪から来たんだって、じゃあ、きょうは銀座で飲もうとか言いながら、向こうで本社の人と打ち解けてとか。いまは新幹線で来たと言ったら、帰りは何時かとまず聞かれます。

河　内：いまは本当にそうですね。

有栖川：とにかく、サラリーマン、ビジネスマンをこき使う、みんなを忙しくするためにできたわけじゃないんだけれど。

河　内：食堂車もなくなってしまって。

有栖川：なくなってしまったね。

河　内：ゆとりもなくなりましたわ。

有栖川：新幹線というとビジネスマンがばたばたばたばたしているイメージです。ものすごい本数が走っていますから、ダイヤグラム通り動いてという。そんなビジネスマン、ビジネス戦士の道具みたいなもので、トリックをしかけるところが妙味だと私は思うんです。

河　内：さっき、身につまされると言われましたが、まさにそうでね。なかには男の琴線に触れるというか、嫉妬とかいろんな感情が現代風に仕込まれているので。

有栖川：陰惨なだけの嫌な話だったらみんな誰も読まないわけですが、復讐の物語には人の心を引きつけるものがあります。

河　内：正義、ジャスティスというのは復讐するという意味合いがありますからね、もともと。

有栖川：そうなんですか。

河　内：ええ。そういう意味合いが入っているということで、目には目をという法律以前の段階です。今日、資料をつくらないといけないと思ってつくらせていただきました。1980 年代は阪神間に事件が花盛りで、しかも欧米型の富豪誘拐が日本でついに起こり始めたというのが 80 年代です。グリコ・森永事件、芦屋令嬢誘拐事件とかそういうのが次々起こりました。当時、宝塚映像という映画の撮影所がありまして、少年探偵団という８チャンネル、関西テレビのテレビ映画をつくっていました。ちょうど同じ時代なんですね。実際の事件とよく似ているということで、いつの間にかテレビドラマの方はストップになってしまったというんですね。そういうふうな二次劇場事件みたいなことがあったんですが。このころは、あんまり阪神間を舞台にしたミステリー小説は多くない。このへんはミステリー小説の題材になりませんか。

有栖川：阪神間のミステリーって、まあ、ありますよ。それはぽつぽつと。このへんは本当に推理小説の舞台には持ってこいです。

河　内：持ってこいですか。

有栖川：持ってこいですね。

河　内：というと。

有栖川：まず、推理小説は基本的に都市文学なので、都会のメンタリティーが描かれているんです。人は秘密を持っているものとかね。隣の人は何者か、本当の姿を私は知らない。そういうメンタリティーから発生しているので、わりと人混みに消えた人は探せない。そういうのを基盤に成立した文芸ですから。

河　内：要するに、村社会では、隣は何をしているか分かっている人がいるところでは、ミステリーはどうもね。

有栖川：隣の子が生まれた日のことから覚えているとか、あの人の失敗の数々をみんな知っているとかいう舞台では成立しにくい。本来、そういうところから出てきたも

のじゃない。阪神間は、東京と大阪の間で、阪神間に住んでいるとたいがいどっちかに縁がありますね。どっちかに勤めている、学校行っているとか、しょっちゅう遊びに行くだろうし、そこの出身の人だとか。都会の人とか住んでいる。都会自体がすぐ近くですからね。もう 10 分も行けば大阪や神戸で、都市である。都市であると同時に田園なんですね。ミステリーは都会都市文学といいながら、田園小説とか田園ミステリー、田園小説の趣を持つみともあります。

河　内：イギリスがそうですね。

有栖川：イギリスがミステリーの本場ですが、イギリスは日本とまったく国土の余裕が違いますからね。あそこは山がまったくない。丘もろくにないというぐらい、電車で旅行をしたことがありますが、嫌になるぐらい平らですよ。

河　内：そうですか。

有栖川：土地が平坦なので川の流れもゆるい。

河　内：山脈はないですね、たしかに。

有栖川：川は流れが止まっているみたいな感じです。広々していて、田園風景が広がっている。まあ、だから人がゆったり住めます。イギリスでミステリーを読んでいると、不思議な気になることがあるんですよ。主人公とか関係者がロンドンに勤めている。ロンドンのだいぶ大きな会社に勤めていて、そのくせ住んでいるところがすごい田舎でね、ルース・レンデルなんていう作家の小説を読んでいると、朝、ちょっと早く起きたから散歩に来たと。一面に広がる緑、人工のものは何もないと描写してあるんです。小川が流れていて、ヒバリが鳴いて、ああ気持ちがいいなと言いながら会社に行くんです。それでロンドン。

河　内：イギリス人は本当に好きなんでしょ、田園が。

有栖川：田園が大好きですね。それで会社勤めをして、８時ぐらいにもう家に帰っているんです。「ロンドンは蒸し風呂みたいだったよ」と言いながら。どんなところか分からないです、人工のものは何もないと。日本でいうと北海道ぐらいしかないんじゃないかという情景描写がしてあって、ロンドンに普通に車で１時間以上かけて通勤してはるんでしょうけれど。そういうように、田園はミステリーに合うんです。さっき都市文学と言ったことと相反するようですが、田舎を舞台にするとミステリーはすごく映えるんです。

河　内：横溝正史。

有栖川：横溝正史は都会を舞台にした作品も多い。もともと神戸っ子ですからね、どうしても。しかも当時のモダンボーイ。

河　内：典型的なモダンボーイで。

有栖川：モダンボーイが読む雑誌『新青年』という雑誌の編集長をやっていましたから、本当にイケてる人だったんですね。疎開先の岡山県でああ田舎はこんなことがあるんやといろいろ知って、都会人が田園に会ったときというのはミステリーが生

まれるんですよ。ミステリーは、要するに、まちなかであっちやこっちやで事件を起こす場所もないですし、あんまり絵にならないんです。

河　内：そうですか。

有栖川：絵になる殺人現場とかね、そういうのはやっぱり美しい風景が欲しいなと思うときに、やっぱり田園のなかで起きる事件というのは魅力的に書けるし、都会のメンタリティーを持った人が田舎に行くと、いろいろ発見があるんです。

河　内：田舎だったら、当たり前のことがね。

有栖川：そうです。横溝正史が有名な小説で水車をトリックに使っていましたが、あんなん地元の人はあんなあほなこと思きませんよ。水車は仕事に使うものです。都会の人間にとったら、これ何かトリックに使えるんやないか、となる。

河　内：それは都会だと不思議な感じがする。

有栖川：そうそう、なんでもない田舎の風習とか、手毬歌が怖いとか。川や山の風景が、なんかよそよそしい。風が吹いている。ざわざわと木が、こずえが騒いでいると怖い。そういう都会の人が田舎に行ったときに出会う違和感とか、小さなショックとか小さなスリルとか、そういったものを取り込んだミステリーをつくったら面白くなると思います。阪神間は田舎、田園でもないんですが、美しい風景はたくさんありますね。海もあるし、山もあるし、川もあるし。

河　内：舞台設定としては、キャンパスも多いし、ヨットハーバーもあります。

有栖川：そうですね、梶龍雄さんに『裏六甲異人館の惨劇』という長編ミステリーがありましたね。阪神間が舞台なら裏六甲、異人館とかいろいろおいしい言葉もいっぱい出せる。裏六甲もいいですよね。あそこは都会という感じよりも、神戸や大阪からすぐのところと思えないような静かな趣がある。

河　内：それはどのへんですか。蓬莱峡のあたりですか。

有栖川：ちょっとよく覚えていません。いま読めない本なのであんまり詳しく語っても。本屋に売ってないですから。

河　内：蓬莱峡あたりは松本清張の『内海の輪』という作品に出ていましたが、今日の資料では年表式につくってみましたが。

有栖川：梶龍雄さんのは、河内さんが作成したリストに入っていますか。

河　内：入っていないです。

有栖川：阪神間みたいな、完全に都市を持っていながら、田園ミステリーが書けるところは、そうそうありません。

河　内：なるほど、恵まれているわけですね。

有栖川：高原もありますしね。北の方に高原もあるじゃないですか。惜しいなと思ったのは、宝塚映画。

河　内：そうそう、あの撮影所が残っていれば。

有栖川：映画の撮影所があるといったら、本当においしいんですけど。

河　内：ミステリーには特に。

有栖川：はい。最高においしい。刑事コロンボのような感じでも書けるのに。

河　内：あれはハリウッドが近いから。

有栖川：コロンボは「ロサンゼルス市警のコロンボです」と言っていますが、ロサンゼルスは本当においしいというところを利用しています。海あり、山あり、大都市だし、ハリウッドがある。ハリウッドというのは、華やかでセレブリティの人たち、スターがいっぱいいて、大物プロデューサーとか現地監督とか、金持ちで華やかで、なんか欲望のぎらぎらした何かとか、裏で何しているんだろうかとか、興味があるわとか、色々と描ける。そういう人種、しかもこの人たちはよそ者なんですね。土地の人じゃないですから。そういう人が行き交うハリウッド的なるものがあれば、ミステリーはますます書きやすい。

河　内：そうですねえ。

有栖川：宝塚は日本のハリウッドだというような状況でなれば、阪神間はますますミステリーに向いていたんです。

河　内：一時なりかけましたけどね。結局、震災をきっかけに撮影所をやめてしまったんですが、1980 年代はテレビ映画をずいぶん撮っていましたし。だいたい東宝という会社は、東京宝塚を縮めた言葉ですから。4 文字を 2 文字にしたのが東宝です。宝塚はもともと映画をつくっていたんです。宝塚歌劇殺人事件というのはいけませんか。

有栖川：それは絶対駄目です。

河　内：駄目ですか。

有栖川：実在の劇団を使うわけには……。

河　内：男役と娘役がトリックで入れ替わるとか、できませんか。

有栖川：宝塚の名前を変えて、架空の劇団にしないと。

河　内：そうですか。

有栖川：宝塚は阪急東宝グループの許可を得ないとまずいでしょう。

河　内：うるさいでしょうね。

有栖川：阪神間に甲子園球場ありますよね。

河　内：あります。これは大きな素材です。

有栖川：昔ね、東京創元社でユニークな企画がありまして、阪神タイガースをモチーフにしたミステリーの書下ろしのアンソロジーを出したんです。参加作家はみんな阪神タイガースファン。それは編集長が言い出したんです。編集長は東京出身の広島カープファンなんですが。阪神タイガースファンの推理作家がいるからそういうのをやろうとなりました。星野監督が就任した年ぐらいにそんな話が持ち上がって、だったら阪神タイガースファンが書きなさいと言われて、何人も参加したんです。傑作なのが、アメリカ人のエドワード・ホックという作家も参加した。

なんでエドワード・ホックが阪神タイガースを知っているんですかと言ったら、ホックの翻訳者を通じて阪神タイガースのことを教えて書かせると言うんですよ。いんちきやろうと思ったんですが。それでその本ができたとき、ちなみに、できた翌年に阪神タイガースは優勝するんです。縁起ものの本ですね。さらに、それを阪神タイガースの公認グッズにできないかということを編集長が言い出したんですが、無理でした。まあ仕方がありません。短編集のなかで阪神タイガースの選手が犯人になったりするんですから。誘拐事件身代金受け渡し場所が甲子園球場とかね。これは言ってもいいか分かりませんが、阪神タイガースに球団で公認してもらえませんかと言ったら、速攻で断られたそうです。健全な娯楽を追求しているので、そういう推理小説にこんなふうに扱われて、阪神タイガースの選手が犯人とかはまずいでしょうね。いくら架空の選手であっても。

河　内：それはまずい。でも、ミステリーの舞台になるところというのは、まるでつまらないところじゃないわけでね。

有栖川：はい、そうです。

河　内：何か付加価値があるとか、おしゃれとか、金持ちがいるとかそういうところだから舞台になるので、それぐらい構わないと思いますが。例えば、本当に真似た犯罪が起こったら困るということもあるのかしら。

有栖川：いえ、そんなことはない。そんな真似た犯罪が起きるようなリアルなものではなかったですが。宝塚が舞台に、宝塚がそれはいいですね、やりましょうと言いませんよ。

河　内：それは言いませんよね。

有栖川：なったらいいですけれど、ならないでしょ。

河　内：清く正しく美しくですからね。

有栖川：推理小説と反対じゃないですか。いや、ミステリーも美しいものですが。

河　内：西村京太郎さんのトラベルミステリーにはJRがよく使われますけど、関西に私鉄は多くあるのに、私鉄ものはあまりないですね。今度『阪急電車』という小説が映画になりましたけれど。

有栖川：はやったそうですが。

河　内：今津線殺人事件とかできないですか。

有栖川：できても小さいトリックでしょうね。そこも面白かったりするでしょうけれども。西村京太郎さんがJRでいっぱい事件を起こしまくったのは、国鉄時代からの流れでしょう。私鉄でやると、企業イメージがあるので差し障りが出そう。私企業ではない国鉄はいいやろう、ということでしょう。もちろん規模の大きさが好都合だったせいもありますが。鉄道ミステリーは、国鉄で遠慮なく殺人事件を起こしてきました。JRになったら私鉄ではあるんですけれど、やはり全国津々浦々に線路が延びている規模が魅力です。

河　内：いろいろ仕掛けができますものね。
有栖川：寝台車や新幹線を走らせているのも JR ですし。でも、西村京太郎さんは私鉄を舞台でも書いていらっしゃいますよ。近鉄電車とか。
河　内：近鉄電車はちょっと長いから。
有栖川：それ以外にもたくさん作例があります。今津線はちょっと書いていらっしゃらないと思いますが。
河　内：有栖川さんのは国名シリーズですね。
有栖川：題名に国の名前がつくというだけですが。
河　内：いくつか書いていらっしゃる。誰しでもエラリー・クイーンを連想するわけですが、これはやっぱり意図的にですね。
有栖川：はい。
河　内：それほどエラリー・クイーンが好きだということですか。
有栖川：エラリー・クイーン大好きです。
河　内：謎解きの王道はクイーンかな。
有栖川：エラリー・クイーンほど理屈っぽいミステリーを書く作家はいません。理屈っぽさ、論理の面白さが魅力です。
河　内：いままで国名シリーズで何カ国ぐらいやりました。
有栖川：８カ国。
河　内：まだまだありますか。
有栖川：いくらでもありますけれど、最近止まっています。
河　内：次はリビアとか。
有栖川：取材に行くのは大変ですね。
河　内：さっきちらりと鮎川哲也さんの名前が出ましたが、有栖川さん何を思われたか、このあいだ西宮北口の芸術文化センターで鮎川哲也追悼のコンサートをプロデュースされた。これは、つまり鮎川さんを尊敬していたんですね。
有栖川：鮎川哲也先生は昔から大ファンでお手紙を出したりしていました。
河　内：それはまだ若いころ。
有栖川：初めてのファンレターは中学生のときです。
河　内：中学生ですか。
有栖川：ちょっとお会いする機会を得ました。
河　内：皆さん、ここからよく聞いておいてくださいね。作家になるには、中学生ぐらいから手紙を送ったりする。
有栖川：いや、手紙、そんな迷惑なことをしたら駄目ですよ。いやいや、ひょんなことから、最初はファンレター送って、そうしたらお返事くれるからと、手紙がときどき行ったり来たり。
河　内：返事が来ましたか。

有栖川：来ました。こっちが新しい本の感想を書いて送ったりして、そうしているうちに今度、文庫の解説を書くかと言われました。鮎川先生はアマチュアに書かせるのが好きだったんです。私は同志社大学の推理小説研究会に入っていたんですが、そういう推理小説研究会 OB に文庫の解説を書かせるのがお好きだったんです。それがきっかけでお目にかかって、私の書いている小説を読んでもらえませんかとお願いしてしまいました。厚かましいんですよ、こんなんは。読んでくださって。

河　内：自分で書いている小説をね。

有栖川：これは今度、江戸川乱歩賞を取ろうと思っていますと。下心はないんですよ。鮎川先生は江戸川乱歩賞に関係なかったですから。面白いと思うよと。じゃあ送りますとか書いて。あっさり落ちるんですが。落ちたあとで、私は面白いと思うから、知っている編集者に読んでもらおうといって、何人かの方に原稿を読んでもらったんです。

河　内：それは特別なことでしょうね。

有栖川：特別のご厚意です。そこまでしてもらおうとは思っていなかったです。４人目ぐらいまで駄目駄目だと言われました。４人目の編集者の方が会いたいと。会いたいというのも偉そうやな、会って話を聞いてみましょうかというぐらいのことを言ってくださった。それがきっかけです。私が小説家デビューできたのも鮎川先生のおかげで、ご恩は一生消えません。

河　内：もちろん応募作が受賞して作家になる人もたくさんいますが、やっぱり編集者と知り合いとか、何かコネがないと。

有栖川：いやいや、そんなコネなんて、私もできると思っていませんでしたし。コネとかなんだとか、得している人はいいよな。おれはそんなんないよな。けれど、鮎川先生にファンレターを書いたことがコネクションになった。中学生が敬愛する作家に手紙を送るという素朴な行為から作家への道が始まるとは。人生には思いがけないこともあるんですね。

河　内：計算してそこまでやるのは難しいですね。

有栖川：中学生がそこまで遠大な計画を練ってやったら大したものですが、何も考えていなかったから、完全に成り行きです。運が良かったと思います。この会場に作家になりたいという人はいらっしゃるんですかね。

河　内：いらっしゃる気がします。

有栖川：勝負どころってあるんです。鮎川先生が自作を読んでくださるときに、しょうもないものを提出したら、この子はあかんなとなるじゃないですか。ちゃんと書けていないといけない。

河　内：なるほど。

有栖川：コネができたら目的達成というわけではない。チャンスがきたときに、それを捕

まえる準備ができていないと何にもなりません。で、出版社の方とお目にかかって話を聞くと、このままでは駄目だけれど、書き直したらまた見てあげると言われました。そのときにどう書き直したらということは言ってもらえないんです。もうちょっとなんとかならないという抽象的なことしか言われない。そのときに具体的にどう直したらいいですかとか聞いているようでは駄目なんでしょうね。こっちは生まれて初めて編集の人と知り合ったから、何回でも書き直して OK をもらえるまで頑張ろうと思ったんですが、持っていったら、これを見て決めるからと。何回も書き直してもらうのは申し訳ないから、これ見て決めますと言われて、え、チャンスは1回しかないのかと思ったんですが、適当に直して、何度でも見てもらおうなんて甘い話はやはりありません。

河　内：それはそうでしょうね。

有栖川：要するに、勝負どころだったんです。私がやったことをいましゃべるとすごく厚かましい気がするけれど、本来すごく気が弱くて、何かあのうあのうと言う、何を言おうかちゅうちょして、そんなタイプだったんです。先生、僕の書いたものを読んでくれますかとか、よく言えたなとか、いまになって思います。そのときは、言えた。その瞬間は。

河　内：まぁ、でも必然的にそうなっていったんでしょうね。

有栖川：ほかのことは、何か足りないですけれど。

河　内：だって、ミステリー作家になりたかったわけでしょ。

有栖川：もちろんです。

河　内：はっきりしていましたからね。

有栖川：そこだけは。

河　内：ほかの何にもなりたくなかったと。

有栖川：そうです。私なんかあんまり使い途がない人間で、小説を書いて面白いと言ってもらったから、いま世をはばかっていますけれども、小説を書いて誰も読まんでと言われたら、行き場がないんです。

河　内：最初、編集者には何かぴんとくるものじゃなかったんですね、その時は。

有栖川：はやっていないタイプの小説を書いていました。謎解きものははやってなかったんです。

河　内：そのときまだはやっていなかった。

有栖川：はやっていなかった。1980 年代の後半に波がくるんです。80 年代前半と違うタイプが出て、読まれだした。

河　内：私は、夏樹静子さんをよく読みましたが。

有栖川：夏樹さんが注目を集めたのは 1970 年代。社会派ミステリーのトップにいた人ですね。業界ものが多いでしょう。

河　内：ちょっと女性らしい独特の雰囲気もありましたね。

有栖川：すごくビターですね。苦い、読み心地の苦い。
河　内：ちらっと芦屋が出てきたりするんですよ。
有栖川：そうですか。夏樹さんは九州の人ですか。
河　内：ひところ福岡に住んでらっしゃったですね。新聞記者が夏樹さんとゴルフするのが楽しみという、男性に人気のある小説家でした。
有栖川：まあ、美人作家でしたね。人気作家で、山村美紗さんと日本のクリスティーの称号を争った人ですから。争ったといっても本人は争っていないですが。周りがね。
河　内：夏樹さんは、いまどうしているんですか。
有栖川：まだ九州じゃないですか。
河　内：あまり見ないですね、最近。
有栖川：ちょっとお体を悪くしたということもありますし、年齢的にもそんなにばりばりという感じではないです。
河　内:1980 年代後半ぐらいから、もう一回謎解きミステリーというのが復権してきたと。
有栖川：はい。
河　内：すると 20 年ちょっとということですね。
有栖川：そうですね。
河　内：それは有栖川さんあたりからということになりますか。
有栖川:京都大学の推理小説研究会から作家が次々出だしたんです。トップバッターが 1987 年にデビューした綾辻行人さんで、彼を先頭にして京都大学の推理小説研究会から法月綸太郎さん、我孫子武丸さん、あとは麻耶雄嵩さんらが続きます。京都から本格ミステリーが復活した、という感じで。
河　内：それはみんな大学でミステリー研究会に。
有栖川：そうですね、私は綾辻さんの 1 年 7 カ月ぐらいあとでデビューしたんですが、私も同志社だから、京都から立て続けに若い作家が出てきた。本格ミステリーが好きでない人は、関西から何かぞろぞろと出てきたと思ったかもしれませんが。
河　内：特に有栖川さんの場合は関西弁を使うミステリーを書いていらっしゃるし。
有栖川：あれも好かれない要因になり得ます。
河　内：東京の設定にと言われても大阪の設定にした人ですから。こだわりがね。
有栖川：私の作品は、主人公が大阪人だったり、語り手が大阪人だったりしますが、舞台は京都、大阪、神戸の三都を使っているんです。やっぱり地元の大阪が一番書きやすい。勝手も分かっている。けれど大阪の海は、大阪湾しかないじゃないですか。二色浜以外はコンクリートで固めてあって。須磨の海も出したくなる。
河　内：天保山では火曜サスペンスのラストシーンとかね(笑)。
有栖川：天保山で犯人を割り出すとなったら。
河　内：そこに全員集まってきて。
有栖川：みんな山を囲んでもなあ。大阪だけでは海も山も出しにくい。灯台もないし。

河　内：断崖もないのでね。

有栖川：断崖ね。あそこは５メートルぐらいですか。やっぱり大阪は狭い。まずすごく狭い、窮屈だし、もうちょっといろんな風景が欲しい。神戸、京都、大阪にしたら最強ですよ。

河　内：全部入れたらね。

有栖川：もう何も要らない。砂漠とジャングル以外は何でも揃う。そもそも私、大阪にずーっと住んでいるんですが、神戸も京都もすぐ行けて、こんないいところはないわと思っています。それを小説でフルに使わせてもらっているという感じです。

河　内：今日の資料を簡単につくったんですが。現在、西宮にご在住のミステリー作家としては貴志祐介さんがいます。

有栖川：存じ上げています。

河　内：ホラーミステリーの、

有栖川：ホラーも書けばミステリーも書くし、SF も書くしという。エンターテイメントの、超大型の作家です。

河　内：この人も頭がいいんでしょうね。そうじゃないと書けないと思うんですが。かなり力作を書いておられる。

有栖川：ご出身は大阪で、現在は西宮にお住まいです。

河　内：甲子園にお住まいですね。

有栖川：はい、熱烈な阪神タイガースファンですね。

河　内：柏木圭一郎の『有馬温泉陶泉御所坊殺人事件』には、御所坊の社長が実名で出てくるんです。金井社長がそのまま本当に出てきてしゃべるのでびっくりしました。

有栖川：それは、もちろんご本人の了解を得て。

河　内：もちろんそうです。有馬温泉なんかもやりようによっては面白い設定ができると思いますが。

有栖川：そうそう。ここらには温泉もある。山あり、海あり、高原があり、温泉もある。なんでもあるわけです。

河　内：大阪の人は、大阪名物の地下街なんていうのはあんまり使いたくないですか。大阪の地下街はかなり特徴的だと思うんですが。

有栖川：考えているんです。あれをトリックに使ったミステリー作家はいないので。

河　内：いないですよね。

有栖川：大阪の地下街を使ったミステリーはないんです。

河　内：世界で最も使われている地下街ですね。駐車場だけでなくて。本当に商店が多いし、警察の入口まであります しね。

有栖川：ありますね。あそこでデートの待ち合わせすると安全。警察の前ですからね。

河　内：地下街というのは、「この扉を開けないでください」というところを開けたらいろんなものが見えるんですよ、本当に。

有栖川：面白い話を知っていたらもっと教えてください。

河　内：思わぬところへ出るという。

有栖川：梅田の地下で考えているんですよ。SF は有名なのはありますよね。堀晃さんの『梅田地下オデッセイ』

河　内：堀晃さんの。

有栖川：SF 風で、梅田の地下街に閉じ込められるんですよ、たくさんの人が。それで出られないんです。なかでみんな独自の進化を遂げるんです。そして生存のためにグループに分かれて戦う。プチシャンゼリゼのあたりに立てこもったやつが堂島から来るやつと戦いがどうのこうのと。食糧の争いもありますから。『梅田地下オデッセイ』の堀晃さんの小説は、いま本はちょっと手に入りにくいんですが、インターネットでご本人が公開しています。

河　内：SF はいまはもうあまり読まれなくなったようで。ミステリーばっかり盛んになっている印象。

有栖川：そんなことない、そんなことない。SF も結構盛んですよ。

河　内：そうですか。

有栖川：新しい方いっぱい出てきていますよ。

河　内：よっぽどアイデアを凝らさないとあかんでしょうけどね。

有栖川：SF は大変ですよ。大阪、関西でね、SF の方も人が多いですね。

河　内：小松左京さんは、甲東園に住んでおられた時代があったんですが。これは非常にロマンチックな、雄大なロマンを書いてらっしゃいます。

有栖川：小松さんは SF の話でいくと、ちょっと別の話に膨らんでしまいそうなので、ちょっと止めておきましょか。なんか話したい気もしますが。

河　内：ミステリーに戻しましょう。いま地下街のことを書きたいと思っているということですが、いつも並行して何作か書いたりしているんですか。

有栖川：それはない。

河　内：やっぱり一つ。

有栖川：目の前ことにたいてい追われていますから。いまもかなり追われているんです。

河　内：いつも締め切りに追われている。

有栖川：追われているというか、仕事が遅いんじゃないですよ。売れっ子だから忙しいわけではありません

河　内：その場合は、ストーリーを膨らませるのに大変なのか、それとも決定的にアイデアが出てこないのかどっちですか。

有栖川：アイデアが出てこないときは地獄です。

河　内：あるでしょう、そういうことが。

有栖川：まさに、いまがそれなんですけど。

河　内：締め切り寸前に出てくるとか。

有栖川：生々しい話ですが、今月末までに１本書かないといけないんですよ。

河　内：もう時間がない。

有栖川：えらいことになっています。

河　内：今月、もうないじゃないですか。

有栖川：ただしね、100 枚ぐらい書こうと思っていたんですよ。何枚書いてもいいと言うんですよ。昔はこんな依頼はなかったんですが、最近はわりとそんなんがあって、作品にふさわしい長さでお願いしますと。20 枚なら 20 枚でいい。200 枚ぐらいになるなら早めに言った方がいいでしょうけれども。100 枚ぐらいは書こうかと思っていたんですけど、いいアイデアが全然出てこなくて、月末締め切りでしょ、書き出したのは昨日です。

河　内：昨日。

有栖川：おとついの時点で、書くことがまったく決まっていなかったんですよ。これは生まれて初めて書けませんと言おうかなと思ったんですが、ちょっと浮かんだんです。そのアイデアはね、40 枚ぐらい書けるかなという話です。昨日、連絡取ったら、40 枚で結構ですよ、作品に合うふさわしい長さだったらいいと言っているでしょうと。だから昨日で８枚書きました。あと、40 枚というか 50 枚ぐらいになるから、今日からあと５日間ぐらいですよね。１日８枚書いたらだいたい終わるでしょう。

河　内：じゃあ、いま大変なんですね。

有栖川：大変ですよ。本当はしゃべっている場合じゃないんです。どんな仕事でも嫌なことってありますけど、ほかのいろんな仕事では行き詰ったときに、何かすることがあるじゃないですか、書類や在庫の整理をするとか、得意先を回るとか、とりあえず汗をかいて。私の場合、何もないんです。アイデアが浮かばないと何をすることもできない。

河　内：何か猫と遊ぶとか。

有栖川：それたただの逃避です。苦しくなると、目に映るものから何かアイディアが浮かばないかと心銀します。蛍光灯、コップ、電話……何かにならないかと。これがまた考えてみたらこっけいでしょ本人は仕事で書かないといけないから必死で探しているんですが、何かトリックが見つかったからといって誰が幸せになりますか。病気が治るのか、この世の中から病気が減るわけでもない。

河　内：いやまあ、それは壮大な無駄の楽しみをやっているわけですが。

有栖川：遊び。

河　内：遊びですよね。

有栖川：職業でこんなに悩んでいるとかいいながら、独特の嫌な感じありますよね。

河　内：それで、なんとかいけそうなんですか。

有栖川：８枚、着手しましたからね。

河　内：やっぱり夜中に書くのですか。

有栖川：夜中から朝にかけて。今日も帰って８枚書くんですが。まだちょっと書くことがはっきりしていない。もやもやとしたところがあるんですよ。

河　内：でもいままで全部乗り切ってきたんでしょ、なんとか。

有栖川：いままで乗り切ってきたから今回も。これしかないですね。

河　内：アイデアが出なくなったら、もう駄目ということですね。

有栖川：推理小説はアイデアが要りますからね。

河　内：人間関係のあやだけ書いていてもしようがないですもんね。

有栖川：アイデアが浮かばなかったらほかの小説に変更しないといかんでしょうね。どんな小説でも、何がしかのアイデアは要るんですけどね。

河　内：でも、『闇の喇叭』という、最近出された近作はちょっと謎解きから広がってきてね。

有栖川：謎解きもありますが、それ以外の要素が大きな小説です。

河　内：若い女性が主人公という非常に珍しいケース、有栖川さんもそういう年になったのかなという。

有栖川：17 歳の女の子を主人公にしています。これを 30 歳ぐらいで書いたらね、何となく書きながらおれの彼女と思ったかも。

河　内：なってしまいますよね。

有栖川：そんなもんやと思いますよ。30 歳ぐらいで書いていて、女の子を動かして小説を書くとね。この年になると、それはあり得ない。もはや娘ですね。書きながらこの子大丈夫かいなという感じで。

河　内：でもまだ 50 歳前後。

有栖川：52 歳です。

河　内：加藤茶は 62 歳ですよ。

有栖川：そういう特殊な人と比べていただいても。

河　内：だけど、楽しみですね。世界が広がってくるというのは。

有栖川：はい、何を書いてもいいわけですから。

河　内：いわゆる、もう謎解きに徹して。あえてどろどろした人間関係を書くのには拒否してきた有栖川さんでも、やはり何かまた違うものを書きたくなってくるということですか。

有栖川：書きたいものって広がってはいきますけれども。でも、何か自分の書いているもの、あれはもうできた、あれもできた、クリアした、卒業したといって前へ、前へ進んでいくという感覚はありません。そんな人はいるのかな。完璧な何かができた、成し遂げたということは私にはない。自分のなかの変われない部分、変わらない部分、変わりようのない部分というのを持ちながら、まだずっと書いていきたいと思います。

河　内：有栖川さんはエッセーがなかなかしゃれていて味わいがあっていいと思いますが。
有栖川：私ね、エッセーがうまいと思うんですよ。
河　内：うまいと思います、ほんと。
有栖川：ねたが切れないしね。
河　内：猫のエッセーを書いたら。猫の本は売れますよ。
有栖川：売れはしませんよ。エッセー集が売れるのは、よほどの達人かネームバリューがある人だけですよ。
河　内：もうあるでしょ。
有栖川：エッセイストとして認められていませんって。でもエッセーはなんぼでも書けますね。いい気分転換になります。
河　内：ファンタジーとか幻想小説とか、そういうのはどうですか。一度書かれたことありましたよね。
有栖川：鉄道がらみの怪談ばっかり集めた短編集で１冊出したんです。それは阪神間出てこないな。そのあと大阪の天王寺七坂をモチーフにした怪談を書いています。大阪はのっぺりしたまちですが、真ん中あたりが台地になっていますね、上町台地という。このへんの坂に比べればなんでもない坂ですが、ちょっと市内に七つ特徴的な坂があるんです。
河　内：なかなか雰囲気のある坂がありますね。
有栖川：このへんにあったら目立たないかもしれないけれど、大阪にあるから独特の風情を醸し出している坂で、それぞれにいろんな物語が眠っている。そこを題材に書いていて、いずれ一冊にまとめます。
河　内：そういうのは、これはまたアイデアの産物になるんですか。
有栖川：何がしかのアイデアは一応要りますが、推理小説を書くときよりは気が楽かな。先人が書いた物語と似た着想でも許されますから、怪談らしく書ければいい、と思いながら想を練ります。ミステリーを書くより楽かな、と思っていたら落とし穴もあって、結局、怪談として書きたいことはこうですねというところが似てくる。私の怪談の特徴というのは幻想小説に近いものが多いんですが、どちらかというとしっとり系ですね。そうならざるを得ないのは、天王寺七坂というのは周りの人がたくさん住んでいますからね。そこを舞台に夜な夜な生首が飛び回るという話を書いたら、うちの家の前で気持ち悪い話、書くなよと怒られそう。
河　内：わりと叙情的なものを書いておられますね。
有栖川：非常に叙情的なまとめ方をします。人間というのは死んでも思いはどこかに残るんだ。怪談は、そう思いたい人の情の反映でしょう。死者が幽霊となって姿を現すときもあれば、音とか気配とかで何か生きているものに伝えようとする。死んでも思いは残る。それが怪談ということだと私は思っているんだなというように書きながら気が付いた。やっぱり最後そんなまとめ方になりますね。それはいい

んだと思う反面、もうちょっと落としどころを散らんとあかんなと思ったりする。

河　内：このあたりは、あんまり怪奇小説というのは多くないんですよね。震災とかいろいろなことがあったんですが。

有栖川：小松左京さんにすごいのがあります。

河　内：甲山が出てくる小説。

有栖川：件を扱った短編です。タイトルは『くだんのはは』

河　内：件は事件の件と書きますが。

有栖川：そうそう。半分牛、半分人間という、そういう子どもが生まれると未来のことを予知する。あの作品は阪神間を舞台にした小説で一番怖い怪談だと思います。

河　内：風土的にあまりおどろおどろしいと思われていない感じがするんです、このへんは。ネアカな感じがするのか。

有栖川：明るい、華やかな感じがしますね。

河　内：ミステリーはあるんだけれども、どろどろした怪談というのは少ないような気がします。

有栖川：自然も豊かですが都会ですからね。

河　内：例えば、福知山線の事件とか実際にいろんな事件があったわけですが、あまり小説としてそういうふうなものは出してこない、わりと私生活に限定した小説が多いなと。

有栖川：ささやかな私生活ですか。

河　内：『細雪』の時代からね。いわゆる社会派とか、あまりそういうのと関係なく。

有栖川：たしかに。

河　内：そういう私生活を描く。

有栖川：本格ミステリーが積極的に描かないものですね。日常性や社会性へのアプローチが弱いから、横溝正史なども若いうちに熱中する幼稚なものみたいな見方もされていたんです。

河　内：なるほどね。

有栖川：社会派推理小説が登場して、やっと推理小説が市民権を得たとも言われました。その見方も一面的ですよね。社会派の体裁を取ったら大人の読み物になるなんて。やぼだと思います。

河　内：それはそうですね。

有栖川：書き方次第ですけれどね。

河　内：しかし、横溝正史というのは奇想天外なミステリーを書く人ですが、よくあれでちゃんとつじつまが合うように解き明かすんだから、それは頭のいい人やと思いますね。

有栖川：奇怪な事件でもつじつまを合わせてきますね。

河　内：すごいと思いますよね。

有栖川：よく考えるとあまりつじつまが合っていないときもあるんですが。合っていなくても合っているように思わせるというのが、またすごい。

河　内：ところが、実際には血を見ても真っ青になるような人だったということで。

有栖川：横溝さんはそんな感じだったらしいですね。ほかにも弱点がありました。谷崎潤一郎と同じで怖くて乗り物に乗れないとか。

河　内：ところが世間では、映画によくなるので、横溝正史といえば血がいっぱい出てくる印象があるんだけれど、原作には血が出ていないんですね。

有栖川：そう、原作には出てきません。

河　内：これは有栖川さんに言われてなるほどと思ったけれど、ミステリー小説には殺人の場面はないんだと、基本的に。

有栖川：人殺しの場面は省きまから。

河　内：映画でそれをやってしまうんで、生々しく見えるんだけど。

有栖川：死体は出てきますが、殺す場面を書いたら犯人探しになりません。

河　内：そういうおしゃれなミステリーとまったく違うのは、いわゆるアメリカのハードボイルドといわれるもので、私は全然面白いと思わないんだけれど、あれは一体何だろうと思うんですが。

有栖川：うーん、ハードボイルドを誤解されているかも。

河　内：そうですか。

有栖川：拳銃を打ち合いするのがハードボイルドではありません。読まずにそう思っている人もいますが。なんかトレンチコート来た探偵がきざなことを言うんやろとかね。そうではなく、基本的にハードボイルドとは文体のことですから。

河　内：文体ですか。

有栖川：感情表現しない小説をハードボイルドというんです。

河　内：なんかいつも令嬢が誘拐されて、電話がかかってきて。

有栖川：娘がいなくなった、探してほしいみたいなのはよくありますね。それで探偵が引き受けて、いろんな人がインタビューされる。次から次へ関係者に当たって、まわっていくわけです。あれはインタビューを繰り返すことによって、関係者の人間関係やひいては現代社会の諸相が浮き彫りにしていくわけです。

河　内：そういうことなんですか。

有栖川：探偵という、どこの階層にも属さないような人間は、インタビュアーとして適任なんです。ハードボイルドの文体をつくったのはヘミングウエイ。チャンドラーとかハメットがつくったわけじゃなくて。

河　内：ヘミングウエイですか。

有栖川：あの乾いた文体をさしてハードボイルドと呼ぶんです。『老人と海』なんていうのは、カジキと格闘するだけの話ですけど、高校時代に読んで格好いいなと思いました。

河　内：あれは名作ですね。

有栖川：面白いでしょう。あの老人というのは、アフリカへ行ったことがあるんでしたっけ。それでよくライオンの夢を見るという。最後に結局悪戦苦闘の末、獲物を全部サメに食べられてしまって、何もなく戻ってきて眠るんです。そして、ライオンの夢を見る。

河　内：それがラストですね。

有栖川：悲しかったとか、悔しかったとか、やるせないとか書かない。要するに、演歌の反対なんですよ。演歌で切ないなんとか雨が降る。ああ、とかいうのを、老人はライオンの夢を見る。それがハードボイルドなので、べつにトレンチコートとか要らないです。

河　内：それはアメリカ独自のものですか。

有栖川：アメリカ人が得意としていますね。日本にも優れた作品はありますけれど、なかなか根付きません。日本人はやっぱりウエット、演歌に酔うんですよ。日本ではえてしてハードボイルドもこぶしが利いていますよ。結構、泣けるハードボイルドなんです。それはウエットやろ、と思う。

河　内：『非情のライセンス』とか。

有栖川：国民性かなあ。やっぱり日本人はそれかなと思って、じんときたりもします。ハードボイルドのようでちょっと浪花節が入っているみたいな。イギリス人もあまり向かないようです。

河　内：そうですか。

有栖川：イギリス人がハードボイルドを書くと冒険小説っぽくなる。イギリス人は本当に冒険の物語がで、うまい。さすがは『宝島』『ロビンソン・クルーソー』の国。娘が消えた、探してほしいと言われたら、イギリスの探偵は関係者を当たっているうちに、波乱万丈の冒険に巻き込まれるんですよ。いつしか海上が舞台になったり。イギリス同様に日本も島国なのに海洋冒険小説はほとんどありません。国民性はそういうところに出ますね。

河　内：ミステリーが栄えている国というのは意外と限られていて、法治主義の根づいた民主主義国家になるわけですが。フランスのミステリーは英米と違いますね。

有栖川：フランスは独特ですね。あそこは心理小説の国でしょう。

河　内：登場人物が少なくてね。

有栖川：心理小説の伝統がミステリーにも出ている。４人、５人までの人物が繰り広げる心理サスペンスが得意ですね。ひところは日本のサスペンスドラマがよく原作にしていました。

河　内：恋愛小説みたいで。

有栖川：そうですね、人間関係が生んだ何か危険なものがミステリーとしてのかたちを生む。頭を使った謎解きという感じは希薄です。

河　内：独特の雰囲気ですね。

有栖川：人の心のすれ違い、人間の怖さをうまく描きます。

河　内：シムノンの『メグレ警視』シリーズが有名ですけれど。ミステリーというのは理屈っぽいもので、現に有栖川さんも理屈っぽいんですが。ところが、これは世界で一番理屈っぽいドイツが、ミステリー文学が栄えていないんだそうです。

有栖川：ドイツ人もミステリーを書いていますが、伝統的にドイツのミステリーは振るいません。充分に紹介されてこなかったせいもありそうですが。

河　内：面白いことですね。

有栖川：ドイツの本屋に行って、ミステリーのコーナーに行ったら、アガサ・クリスティーがいっぱい置いてあるらしい。旧聞なので、今は事情が違うかもしれません。

河　内：これはなぜかということですが。

有栖川：ドイツといえばロマン派。ホフマンとかノヴァーリスとか。

河　内：思いきりロマンチックな。

有栖川：ロマンチックですね。

河　内：一緒の反動ですか。

有栖川：ええ、その反動かもしれません。ドイツ文学の前川道夫先生がそううおしゃっていました。ドイツ人というのは本当に理屈っぽい。

河　内：らしいですね。

有栖川：ドイツ人は日常会話で「Das ist logisch」と口にします。「なるほどね」ぐらいの軽い言葉らしいんです。日本語にしたら、「それは論理的だ」。日本人が、「それは論理的だね」とか言ったら、何をすましているみたいな感じでしょう。

河　内：たしかに。

有栖川：そういうふうに論理的であることを重んじる反動がロマン派の文学につながったとしたら、理屈の面白さを楽しむミステリーからは離れていきます。まあ、たった一人のアガサ・クリスティーが生まれていたら、ドイツミステリーも盛んになった可能性もなくはないですが。

河　内：普段理屈っぽいので、遊びの世界だけは思いっきりロマンチックな、理屈じゃないものを求めると。

有栖川：だと思います。そういうね、日本人ってあんまり理屈っぽくないでしょう。理屈はそうだけれど、情では、やっぱりようせんわと。

河　内：それはそう。

有栖川：私、私生活ではいつもそうです。もう義理と人情の人間ですよ。

河　内：そうですか。

有栖川：理屈はそうだけれど、やっぱりやったらなあかんやろとか、そんなんいっぱいあるじゃないですか。そうは言うても、頼むわとか。

河　内：O 型人間ですから、頼まれると断れない。きょうも安いギャラで来てくれてはる

んですけど。

有栖川：日本人はそんな理屈通りに話が進むわけがないと割り切っている。

河　内：そうそう。

有栖川：実際、警察だってすぐ自供させようとするでしょう。死んだ人の顔見たらどうやねんとか、おまえかって昔から悪やったわけやないやろうみたいな話、あんなん絶対外国で言うてないと思う。欧米では警察も「自白するわけがない。したらおしまいだからな」と考えるところを、日本人の場合は「良心があるなら言え」と迫る。やっぱり情が勝っていると思うんですよ。だから、ドイツとは逆でその反動で推理小説のロジックを楽しむ趣味も出てくる。

河　内：なるほどねえ。

有栖川：推理を突き詰めればみたいな話がファンタジー性が帯びてくるんでしょうね。いや実際、絵空事やといえばそうなんですが。

河　内：謎解きを徹底的にやっているのは日本ですか。

有栖川：現在においては、いわゆる名探偵が出てきて、謎を解くとか密室トリックみたいなタイプのミステリーが世界で一番ポピュラーなのはおそらく日本です。最近は、台湾、中国や韓国でも本格ミステリーが読まれていて、日本のものをでモデルにして書く作家も出てきています。もちろん欧米の作品もどんどん翻訳されていますから、日本だけをモデルにしているのではないとして。

河　内：日本はミステリー先進国と言っていいわけですね。

有栖川：本格ミステリーに限らず、レベルは高い。

河　内：有栖川さんのものも翻訳されているんですか。

有栖川：はい。台湾。中国。韓国では。タイで翻訳されるミステリーも出てきましたね。

河　内：つまり、市民社会らしきものができてきた国々では、ミステリーが出てきているということですね。

有栖川：民主的な考え方が理解され、経済成長で各国の生活様式があまり変わらくなってきたせいてしょう。

河　内：そうでしょうね。

有栖川：同じアジア人同士で、分かりやすいこともあるでしょうし。

河　内：これは有栖川さんだけじゃなく、森村誠一さんもよく言っていますが、法治国家で罪刑法定主義が保障されていないとミステリーはあり得ない。権力者が犯人を決めつけてしまう社会では、アリバイもへちまもないので。どんな弱小な個人であっても、アリバイを証明できるという可能性を残していない社会ではミステリーは存在しないから、そういう意味でデモクラシーの証がミステリー。

有栖川：デモクラシーは、ミステリーが書かれ、読まれる前提ですね。リビアでミステリーは書けません。

河　内：共産主義国もはまあそうですわね。

有栖川：そうですね。おまえが犯人だと言うんだったら、犯人だと言う側が証明しなければいけないんです。江戸時代みたいに、おまえがやったやろと、違うんだったら証明しろと言われて、容疑かけられた方が無罪を自分で証明しないといけないなんていったら、それはもう推理小説は成立しない。

河　内：そういうことですね。

有栖川：ずいぶんと話題が阪神間から離れていますが。

河　内：いまもアイデアを考えていらっしゃるわけですか。必死になって。

有栖川：いまは考えていませんでした。この対談に集中していて。

河　内： 1980 年代は本当にこのへんで大事件が多かったんですよ。日本でも欧米型の富豪誘拐とか令嬢誘拐が起こり始めたといろいろ話題になったんですが、特にグリコ・森永事件とか、劇場型犯罪というのがありました。バブルちょっと前ぐらいですかね。

有栖川：そうですね。

河　内：1980 年代半ば。

有栖川：バブルが始まった頃かな。始まりかけかもしれないですが。

河　内：吉村達也さんの『六麓荘の殺人』とか、斉藤栄さんの『芦屋夫人殺人事件』とか、こういう影響を受けて書いたのかなと思うんですが。

有栖川：そうかもしれません。

河　内：現実の事件に影響を受けられたみたいなことはありますか。

有栖川：うーん、どうかな。

河　内：有栖川さんはあんまりないと。

有栖川：いや、ぱっと浮かんでこないけれども、実はあるんじゃないかなという感じです。阪神間は豪邸が似合うから、非常にこれもミステリーの舞台としてはいいですね。財を成した貿易商の異人館も出せます。

河　内：関西学院大学のキャンパスなんかはどうですか。きょう久しぶりに来られて。

有栖川：関西学院大学の近くが出てくる小説も書いたことがありますよ。『雨天決行』という短編です。作中で関西学院大学の名前も出てきました。

河　内：名前も出てきたんですね。

有栖川：関西学院大学の中で事件を起こしてはいませんよ。怒られるでしょ、それは。

河　内：いや、この際、一度くらい、どうですか。

有栖川：時計台のへんから死体が、首が出てきて逆さまに。

河　内：古い設定ですね。

有栖川：いやいや、OB でもないしね、あまりそんな失敬なことはできません。

河　内：学園ものはあまりありませんか。ないことないですね。

有栖川：大学生が出てくる小説はよく書いています。勝て知った自分の出身大学をモデルにして。

河　内：いま地下街の設定を考えておられるということですが、まだまだミステリーに使われていないところはあるでしょう。思いがけないところがあるんじゃないですかね。

有栖川：これから発見される舞台があるはずです。いまは猛スピードで時代が変わっているでしょう。IT 技術が進んでね。10 年もしたら風景も変わると思いますよ。

河　内：作家も大変ですよね。本当に今は唾液一つでもう全部分かっちゃうということですから。

有栖川：いろいろ書きにくくなりますね、推理小説は。

河　内：それから監視カメラがすごく増えているから、それを前提にしたものは書けるけれども、逆に書きにくいものも出てきますよね。

有栖川：何をしても記録が残るでしょう。まちを歩いても、買い物をしても、どこかへ旅行をしても、移動しても、全部痕跡が残るという社会になりつつある。

河　内：なりますね。

有栖川：社会防衛という意味では仕方がないのかもしれない。イギリスなんかは監視社会になって市民が歓迎しているとかいいますよね。監視カメラが街中に増えて、本当に安心していますって。

河　内：本当みたいですよ。

有栖川：そういう側面はあるにせよ、推理作家にとってはきびしいですね。車でこっそり移動することもできないし、駅にもビデオカメラがありますからね。

河　内：時刻まで全部入っていますしね。そういう意味ではそれをかいくぐってミステリーを書いていくのは大変ですね、これから。

有栖川：推理作家というのは、犯罪のやり方を教えたり、広めたりするために書いているわけじゃないけれど、やっぱり監視社会は息苦しいと感じます。あなたが何をしているかは全部管理されていますというのはねえ。完全にすべての個人の生活を監視するなんてことはもちろんできないとは思いますし、何かそういう管理とか締め付けみたいなものが強まれば強まるほど、それを食い破るようななんなりかのトリックが生まれるのでは、とも思います。

河　内：アメリカにはたくさんありますが、ゲーテッドコミュニティ。時間がきたら門を閉めてしまうまち。

有栖川：それで考えているんです、いまね。あんまり言うたらあかんかな。あれ絶対いい素材ですよ。

河　内：芦屋にできたんですよ。海の方に。日本では珍しい。

有栖川：ゲーテッドタウンね。

河　内：安全のために住民がロックして、自分たちしか入れなくなる。

有栖川：興味があるなあ。ミステリーに使えそう。

河　内：そうですね。

有栖川：要するに、そこは通行人が歩けないんですね。そのまちに住んでいる人で、それこそどうなっているかまだ調べていないですが、入館証がないと入れてくれないビルみたいなところなんですよね。

河　内：アメリカにはたくさんあります。日本では珍しい。

有栖川：だから、自分で自分を隔離しているわけか。変な人が入ってこられないようにと言いながら、変な人を隔離できないから、自分で自分を隔離しているまちなわけですよね。安全は安全でしょうけれど、そこで何か起きないかなと、やっぱり推理作家は発想してしまいます。世界で一番安全なまち、もう怪しいものは全部排除したまちができましたというのを頭に描いた上で、何か盲点がないのか。それで悪しきものをすべてを追い出したつもりになって大丈夫なのかと。セキュリティの厳重なタワーマンションやゲーテッドタウン。そそられますね。

河　内：芦屋の奥池なんかも有料道路でしか入れないところですから、ある種のゲーテッドタウンなんですが。そういうものもミステリーになりやすいところもありますが。

有栖川：本当にこのへんはなんでもありますね。ゲーテッドタウンまで揃った。

河　内：あと、高齢化社会というので高級老人ホームとか。

有栖川：ああ。老人ホームとミステリーも合いますよ。

河　内：登場人物のなかに認知症がかなり増えてくると、本人も記憶していないとかね。

有栖川：鮎川哲也の『死が二人を別つまで』という作品は、老人ホームでお年寄り同士が結婚するほほ笑ましい場面で始まりますが、それが事件を招くんです。認知症の人が出てくるのはアメリカの小説でありました。これから作例が増えそうな気がします。

河　内：老人ホームは人間ドラマとしてはすごいところみたいですよ。三角関係とか四角関係とか。映画会やるにしても、どのおじいさんの横にどのおばあさんが座るかで大変なことになるみたいです。

有栖川：それは恐ろしいですね。

河　内：ある意味、子どもに返っている面があるというか。

有栖川：どうやろう。

河　内：有栖川さんの小説には有栖川有栖という登場人物が出てきますが、あれは助手でしたっけ。

有栖川：助手みたいなもんですね。いわゆる相棒。

河　内：これはしゃれですか。本当の有栖川有栖さんみたいな人間が出てくるということはない。

有栖川：私とはもう。だって、年も違うしね。彼は34歳独身で、こっちはもう52歳で、銀婚式も済んでいるみたいなところからして大いに違うんですが。あれは遊びですよ。推理小説では昔からあって、ペンネームと同じ人物が出てくるというのは。

あるいは探偵にしてしまうというのもあります。

河　内：平凡な質問ですが、作中人物の名前は空想で、それともやっぱりどこかで見た名前とか。

有栖川：名前をつけるのは実に面倒です。

河　内：そうでしょ。

有栖川：私だってきっと１千ぐらい名前をつくっていると思うんですよ。

河　内：出尽くしている。

有栖川：同じ名前を使いたくないしね。と言いながら使っていると思うんですが。よくある手ですが、昔は電話帳で探したこともあります。

河　内：電話帳で。

有栖川：最近はそんなことはしません。ネット上から拾ったりもしますが、ストックしておくのがいいですね。街を歩いていて、看板や表札を見ながら。

河　内：メモっておく。

有栖川：覚えておく。これは、パソコンを打とうとしたときに思いつかない名前だなと、でもたしかにこういう名前の人がいるよなという名前を覚えておくよう心がけています。その作品のなかによく出てくる漢字とかぶらないようにもします。例えば、ずっと谷川に沿って物語が展開しているときに、谷とか川という名前の人は書かないようにしたり。

河　内：アイデアも突然寝床で思いつくとか。ああいうときメモしておいたらいいという人と、書いていても大したことないという二つの説が。

有栖川：大したことありますよ。すぐメモを取らないと。

河　内：書きますか。

有栖川：なんでも忘れますからね。若いときに比べたら全然だめ。

河　内：私は忘れることにしているので。

有栖川：忘れたらあかんでしょう。

河　内：夜中にぱっと急いで書いて、次の日に見たら大したことないというのもあるんだけれど。

有栖川：本当にいいアイデアはなかなか浮かびませんから。どのアイデアもまあまあ。でも書いておかないと、初めのとっかかりすらできない。ささいな思いつきでも、これとこれを組み合わせたら話になるとかいうふうにも使えることがあります。書き溜めてあるメモを最近見たら、まるで覚えがないものが少なからずあって、怖くなりました。こんなんいつ思いついたと。いいアイデアということもないかもしれないけれど、ややこしいアイデアってあるんです。あれがこうなって、こうなって、そうしたらここで勘違いするんじゃないというふうなアイデア。自分でも筋が通っているかどうかよん分からないというのがあるんですよ。そういうものは結構細かくメモに書いておいて、あとでじっくり考えます。最近はパソコ

ン上で書きながら考えますね。私のパソコンには創作メモというファイルがあって、そこにあれこれ入っています。パソコンで書くと便利ですね。ああなって、こうなって、いや違うなと思ったら、何度でも書き直せるから。

河　内：というところで、だいたい時間がきてしまったんですが。

有栖川：阪神間のことを。

河　内：まあそれはいいので、有栖川さんという、実作者を一度呼んでみて、どういう人なんだろうと。目の前で皆さん見たい方もいらっしゃったと思います。

有栖川：どういう人と映ったんでしょうか。

河　内：やっぱり作家を長くしているから、独特の雰囲気がありますね。最近かなり遠くからも分かります。なんか近づいてきたなという。気配が。

有栖川：それはただ単に見慣れたというだけでしょう、河内さんが。

河　内：いや、やっぱり独特ですよ。

有栖川：阪神間とミステリーとをいろいろもう少し結びつけるのがいいのかなと思いましたが、河内さん気にしていないから。

河　内：いやいや、別に無理やりくっ付けることないですから。結論的にいうと、都市的な人間が住んでいて、環境的には魅力的な環境が残っていて、山も海もあると。実はミステリーに一番向いているということなわけで、これからどんどん出てきてほしいなと。

有栖川：まだまだ、舞台の豊かさに比べて作例の方が少ないと思います。

河　内：伊丹空港もありますし、ゲーテッドタウンもあるし。こうしてみるといっぱいあるんです。そういう意味では、もっともっと、たとえば関西学院大学からもぜひミステリー作家が出てきていただけたら。

有栖川：ミステリー版『細雪』というのもいいですね。

河　内：そうですか。谷崎潤一郎の。

有栖川：『細雪』はまったくミステリーではないんですが、あの四姉妹がミステリーを演じたら面白そうです。横溝正史に出てくる三姉妹、三兄弟ものみたいになるかも。

河　内：そういう意味ではそうかもね。

有栖川：うまくやればミステリーの世界も転落するのになあと。転落というとあれですけど。

河　内：面白いですね、それは。

有栖川：変換できるんじゃないかな。

河　内：細雪殺人事件

有栖川：堂々たる阪神間ミステリーになるでしょう。

河　内：谷崎は、ミステリーはわりと好きやったからな。

有栖川：好きですね。初期短編、関西に住む前のものに濃厚に影響が表れています。

河　内：横浜にいたときね。あの時代は、あの作家のなかでもミステリアスですしね。一

種のモダニズムだったわけですね。ミステリーは。

有栖川：当たり前のものを当たり前に書くことに飽き足らない作家でしたから。ミステリーそのものを書いていないかもしれないですけれど、ミステリーに近づき、引き寄せられていました。

河　内：結果的に谷崎はミステリーに行かずに、マゾヒストの方に行ってしまったんですが、変態の方に行ってしまったと。

有栖川：でも、楽しいからいいじゃないですか。

河　内：『細雪』はとっても優雅な話なのに、最後の１行を皆さん覚えておられますか。幸子は下痢をしていたとか。スカトロジー、面目躍如な終わり方をしています。

有栖川：わあ、それで今日の対談を締めますか。

（終了）